

紫陽花濡れる風の道で

123 宝仙学園中学・高等学校 鐵道部

「タタン、タタン、タタン、タタン」

連接台車がレールを奏でるその規則正しい音は、穏やかに優しく車内に響いていた。

初夏の箱根。定期運行の終わりを控えた小田急50000形VSEの展望窓から差し込む陽光は、生い茂る青葉を透過し、室内をやわらかな緑色に染め上げていく。

列車は静かに箱根湯本駅へ滑り込んだ。人々の熱気と、別れを惜しむ人々の視線を集めながら、滑らかに去りゆく白い背中を目で追い、私は登山電車へと乗り換える。スイッチバックを重ね、列車はやがて遥かな時を刻み続ける緑の鉄骨、早川橋梁へと差し掛かる。沿線に咲き誇る紫陽花が雨上がりの雫を抱き、鮮やかな青紫色を濡らしていた。深緑の谷へと差し渡された鉄骨の向こうで、湿り気を含んだ風が、列車の窓から吹き抜ける。

遠ざかる紫陽花を眺めながら、鮮烈な赤の伝統に風穴を開けた特別な気品を思い、私はあの純白の記憶を胸深く

へそっと閉じ込めるのだった。

